

～ 理事長だより ～ Vol.3

第34回日本乳癌検診学会に参加してきました。

令和6年11月29-30日の2日間、群馬県高崎市で開催された第34回日本乳癌検診学会総会に参加してきました。全国各地より乳癌検診に携わる関係者が一同に集い、どうすれば、乳がんで亡くなる人を減らすことができるかについて、様々な議論が行われました。国推奨の住民検診は、40歳からの隔年マンモグラフィ検診ですが、自治体によっては、30歳代からのエコー検診を導入しているところも沢山あり、真かどうかは定かではありませんが、ある県は、死亡率が下がり出しているかも？ という情報も小耳に挟みました。

数年前より、30歳代の触診検診が廃止され、沼津市含め、静岡県東部地域の大多数の自治体では、30歳代の女性は、公的補助で検診を受けるすべがありません。また、日本人では、40歳代でもマンモグラフィ検診が適していない乳房の方が多く、エコー検診の方が、より効果的ではないかと検討されています。

日本では25年間、マンモグラフィ検診が行われてきましたが、乳がん死亡率の減少効果は確認されていません。これは欧米のエビデンス（検証結果）を、そのまま日本人女性に適用したためです。日本人女性が高濃度乳房の割合が高く、マンモグラフィ検診での検出率が低く、偽陰性や過少診断のリスクが高くなります。日本人女性を対象とした唯一のランダム化比較試験であるJ-START（超音波検査による乳がん検診の有効性を検証する比較試験）は、超音波を併用することで検診の感度（病変検出率）が向上することを示しています。

多くの女性が乳がん検診に後ろ向きなのは、お金を出してまで痛い思いをしたくない、時間的余裕がないなどの理由が大半を占めます。沼津市界限の住民検診受診率は10%台と低迷しています。乳がん死亡率を低下させるために、どうしたら、皆が検診を受けてくれるか、



医療界、行政、地域住民みんなで、本気で考えないといけません。財源の問題で公費負担での検診には限界があるのも事実ですが、痛くないエコー検診を選べるようにすれば、検診に対するハードルも下がると思います。

我々のスローガンである、「乳がんで苦しまない 社会の実現を目指して」が、叶うよう、これからも活動してまいります。

NPO 法人 ふじのくに乳がん交流サロン

理事長

西村 誠一郎

